



## 2. 出発（自家用車で岡山から石巻へ）

私の車で、午前8時に赤穂 IC から仙台へ向かいました。

名神で少し渋滞がありましたが、北陸自動車道はスムーズに通行ができて、磐越自動車道で新潟から郡山に抜けて東北自動車道から仙台東 IC に午後8時頃に到着。近くのビジネスホテルに宿泊しました。

## 3. 活動1日目



15日、仙台を午前6時半に出発して、7時半にレラに到着。注意事項とガイダンスを受け、本日の

予定表をもらって、3人それぞれがペアになる人を紹介されました。

1日6回の乗務はすべて、病院または市役所から仮設または避難所への片道の送迎でした。この日のボランティアは13人で、車両は6台。

レラ立ち上げから半年間、休みなしで切り盛りされている村島さん（札幌の方）から「明日は予定が多い」とお聞きし、この日は石巻の宿泊拠点に泊まることにしました。

## 4. 活動2日目

16日、この日の予定は38件、うち往復が20件ありました。つまりトリップと考えると58件、これに当日予約を足すと、80件くらいをこなすことになります。

この日のメインは、仮設から日赤までストレッチャーで送迎という方でしたが、リフト車やストレッチャーの経験者は私しかいませんでした。実際にその方の仮設の部屋に行ってみると、とても起き上がれそうにないので、タオルケットを身体の下に敷いて、担架のように持ち上げて、裏のサッシのほうから出てストレッチャーに乗っていただき、仮設と仮設の間は砂利道なので車両までストレッチャーを持ち上げて移動しました。

「入院になるかも知れない」と思いながら日赤まで送りましたが、レラに帰って報告すると、「日赤はめったに入院させてもらえない。骨折して骨が見えていても帰らされる」とのこと。石巻市立病院は被災して全壊、その他の医療機関も医師やスタッフが亡くなったりで、日赤

に集中している。そのために緊急でないと受け入れられないようでした。結局夕方にその方を迎えに行くと、点滴を打ってもらって少し元気になっていましたが、ストレッチャーの送迎は必要な状態でした。

昼食はレラで用意してくださったソーメンとお握りでした。その後休む間もなく、病院から仮設または避難所の送迎を繰り返し、午後6時半終了となりました。

## 5. 活動3日目

17日、予定では透析の病院と日赤にそれぞれ患者さんの往復の送迎があるだけでしたが、土曜日だからか買い物等の依頼で次々に当日予約が入ってきました。

最初は山奥の家から透析病院に行く方で、震災直後は仙台まで透析に通われていて、「石巻市内の透析の病院が再開してくれたので助かった」とおっしゃっていました。

障がい者用の仮設住宅の方から、「携帯電話の使い方がわからないので、販売店へ連れて行ってほしい」という依頼がありました。行ってみると身体障がいの方の棟にはスロープがあり、管理事務所に行く途中には食堂か集会所のような建物がありました。どのような運営形態なのかわかりませんが、さまざまな障害を持っている方が入居されているようでした。

拠点に帰って軽食をとると、また次の送迎。買い物に行った方が「大きい荷物がある」とのこと、別の便で行った人が同乗して同じ仮設住宅に送り、次の人は避難所から知り合いの家に行き、再びその家まで迎えに行って、そのまま駅

まで送り…という状況。

「何をしに、どこに行くか」聞かないで、言われるままの送迎でした

が、理由を問えるとき・問えないとき、問える人・問えない人がいると感じました。

こうして1日が終わり、午後7時頃に石巻レラを出発。仙台のミキ自工に到着したのは夜8時頃でした。支援物資を下ろしてから部屋に案内していただいて、事務所で缶ビールをご馳走になりました。

ビールを飲みながら、今野さんのミキ自工の被害の話や支援物資や支援金募金、寄せ書き等々をお聞きしまし



たが、お客さんが女川町や石巻市、松島町等の沿岸部に多くあって、その方々が甚大な被害を受けたために、仕事が半減しているとのこと。津波による直接の被害を受けていなくても、経済的な被害はとても広範囲に及んでいると感じました。

その後、シャワーを使わせていただき、就眠。翌日は12時間ぐらいで、無事に岡山へ帰ることができました。

## 6. 支援を終えて【感想】

1. 石巻レラでは利用者さんから、「いつまで送迎してもらえるのか」と聞かれるようになったそうです。レラの村島さんたちが半年も休みなしで、それに応えていることを考えると「いつまでこの人たちがもつのだろうか」と思いました。ボランティアは、ご飯を食べても風呂に入るにもお金が要る。車両も持ち込みの車両や借りている車両がほとんどですから、支援は引き際と引き方が難しいと思いました。

2. 3日目に携帯電話の件で迎えに行った障がい者用の仮設住宅は、どのように運営しているのかわかりませんが、施設の利用者のことは施設でできないといけないのでは？ たとえ仮設であっても施設は自立支援法の中で運営がなされているのではないかと。また、一方で職を失った人々がいるわけですから、人も雇っていただけるのでは？ という想いをもちました。

3. 被災地といっても一様ではなく、被災者といっても一様ではありません。さまざまな被害の状況があり、それぞれ立ち直る時期も違ってくるでしょう。避難所から仮設住宅に移行してもそれで事足りるということではないし、暮らしも違う。仮設住宅に移ると孤独になって、自殺する人、精神がまいってしまう人も出てきます。当然、精神的なケアが必要ですが、移動支援は精神的なケアも含めてあるものだと思います。

通院だけでなく、買い物をすること。人に会うこと。ご飯を食べに行くこと。お風呂に入りに行くこと。これらは、日常生活を送るうえで大切な欠かせないことです。瓦礫の処理がついたからとか、避難所が解散したからとかで終了できるものではありません。移動支援は、暮らしを支える支援なので、居場所が変わっても、人の暮らし方が変わっても必要とされるものだし、それゆえにやめることが難しい支援であり、ボランティアという曖昧な形態ではなく、永続できるような仕組みが必要で、その住民が自らその必要性を感じて、行政や社協と一緒に、仕組みづくりを

主体的に行わねばなりません。

大きな被害を受けた被災地ではダメージが大きすぎて早急には難しいですが、仕組みづくりに向けての支援が必要になっているのではないかと思います。

4. 災害が多い国でありながら、国としての災害対策の中に金銭的な積み立てがないことに、改めて不安を覚えました。補正予算を組まなくては何かの手も打てないなどありえないし、権力の中枢にいる人々があまりにも鈍感すぎます。そして、そのような人々を選び続けている私たちも鈍感すぎたと痛感しています。

5. 報道は、当初からセンセーショナルなものばかりが全国放送されて偏りがあるように思いますが、受け取る私たちも「報道されることがすべて」と錯覚して、報道されていないところに思いを馳せることができているように思いました。

6. 被災地ボランティアの募集について、当初から個人のボランティアを受け付けていないように思いました。

それは、「事故が起きたら誰が責任を負うのか」を常に念頭に判断（仕事）していることに起因するからで、移動サービスもそこを問われることが多いです。

ボランティアには「食料も寝る場所もすべて自己責任でお願いします」と自己責任、自己完結を求めながら、自分たちが行うことについては「ボランティアの受付」でさえも自己責任を回避するような判断をしよう。そうした空気が流れているような気がしました。

7. 震災から半年が過ぎて復興に向けて自立していくための手立てを考えて、できることから、自ら実行に移して行かなければならないときに来ているような気がしました。

介護保険も障害者自立支援法も自立を支援するということですが、この国では「自立とは何か」を議論したことがありません。自立とは何かわからないままに自立支援という言葉だけで、「自分たちのしていることが自立支援である」という結論になっています。被災者の自立について、被災地の自立についても、いろいろな立場の人たちと議論をする必要があります。

最後に。

「生命は、常に未来に向かう」 (2011. 10. 4)

\* スペースの関係で中村さんの原文を編集、割愛させていただいたことをお詫び申し上げます。(事務局編集担当)



## 2. 「運転者講習会」、宮城県亶理町で開催！

2011年10月22、23日、宮城県亶理町で「運転者講習会」が行われました。「移動ネットみやぎ災害支援の会」が主催し、(NPO) 全国移動ネット及び (NPO) 移動ネットみやぎ、(NPO) ささえ愛山元の協力のもと、地元のボランティア10名が受講しました。当日は、災害支援の会プロジェクトの柿久保代表（全国移動ネット）と移動ネットみやぎの有志が講師をつとめ、修了証は全国移動ネットの名前で発行されました。



この講習会は、仮設住宅や地域住民の移動困難な方たちの移動支援

を行うための知識や技術を学ぶため、国土交通大臣認定の福祉有償運送運転者講習（セダン含む）のカリキュラムに沿って実施されました。

また、講習終了後は、ささえ愛の皆さんが「水戸黄門」の踊りや、宮城にまつわる歌「さんさしぐれ」などを披

露され、和やかな雰囲気。

充実の内容と講師の熱意、そして講師と受講生の気持ち

が一体となった笑顔あふれる講習会となりました。



### 〈参加者の感想〉

- ・とても楽しい講習だった
- ・目からうろこ、自分中心から今後は利用者中心の活動に
- ・車いすに乗って怖い思いをし、とても勉強になった
- ・いままで安易にやっていた。学びの多い2日間だった
- ・講義でわかったつもりでいたが実技をやってみて、そうでないことがわかった
- ・初心にかえてやっていく
- ・柿久保さんのソフトな言葉の中に真実があった。楽しかった

## 3. 「災害支援シンポジウム」開催。全国移動ネット・杉本理事が発言(仙台)

2011年11月13日に、仙台市シルバーセンターで「震災時の移動サービスについて」が開催されました（主催：



NPO 法人移動サービスネットワークみやぎ、共催：NPO 法人全国移動サービスネットワーク）。

「東日本大震災で甚大な被害を受けた石巻地域の事例を基にして、震災時における公共交通機関の被災実態と、その復旧状況を理解する。併せて、震災以来継続されている NPO、ボランティアによる移動支援活動について理解し、今後の震災時における移動支援の課題と対策を検討する」ことを目的としたシンポジウムでした。

オープニングで、東北運輸局宮城運輸支局長 熊沢治夫氏は、「東日本大震災直後から宮城県はじめ関係市町村の支援協力の下、鉄道代替としてバスの運行確保の尽力や、NPO やボランティアの活動はメディアに取り上げられるなど社会的評価に値する。国交省も、通院や買い物等の足の確保として乗合バスやデマンドタクシー、福祉タクシーを導入してもいき届いていない箇所もある。特に仮設住宅や障がい者の移動に対しては大変な付加価値が求められる。そうした課題解決のためこのシンポジウムが被災地の今後の復興の一助になればと思っている」と挨拶されました。

+++++

以下、『河北新報』記事より。

### 災害時交通障害民間の支援有効（仙台でシンポ）

東日本大震災の事例を基に、災害時の移動支援の課題

や対策について考えるシンポジウム……が開かれた。NPO 法人移動サービスネットワークみやぎが主催し、約 60 名が出席した。石巻市総合政策課の及川伸一課長は、公共交通機関の障害について報告し、「がれきなどで道路状況が悪く撤去されるまで運行できなかった。商業店舗が独自にバスで買い物客を移動させたケースなど、民間の支援が有効だった」と述べた。震災後、石巻市内で（のべ）1 万人以上を送迎し、移動支援してきたボランティア団体 Rera（レラ、札幌市）」のスタッフの村島弘子氏は、利用者のニーズが多様化している実態を紹介。「当初は通院が大半だったが、入浴やお墓参りなども出てきた。支援活動をできるだけ地元を引き継いでいきたい」と語った。

パネル討論で、NPO 法人全国移動サービスネットワーク（東京）の杉本依子理事は「お年寄りや障がいのある方の足が確保されていない。地域にきめ細かな移動支援

が生まれるよう、交通を見直すべきだ」と指摘。宮城大学の徳永幸之教授（交通計画）は「震災で車が使えず、移動を制約される人が一気に増えた。個人個人が自分の車で移動していた震災前の暮らし方を考え直し、交通のあり方を議論していく必要がある」と訴えた。

（『河北新報』2011.11.14 付）

+++++

◆以下、パネル討論で杉本さんが訴えた名言です。

「被災地では生活支援に結び付いた移動を考え、トータルに考えて交通を見直すことが必要。

今回の震災では法律の矛盾がたくさんみえてきた、創意と工夫で行っている自主的な動きに対して行政は邪魔をしないでほしい。関係者でネットワークして声をあげることが大切」。

#### 4. 横浜市青葉区社協、仙台・たすけっとに中古車両を寄贈

2011 年 12 月 21 日、神奈川県横浜市の青葉区社協から仙台のたすけっとに、福祉車両 2 台（マツダ AZ ワゴン、マツダデミオ）が寄贈されました。

贈与式には横浜市青葉区社協から 4 名、横浜移動サービス協議会から 5 名が参列。贈呈式の後、9 名は名取市閑上（ゆりあげ）地区の被災現場や長町の仮設住宅を回りました。



その後、たすけっとの近くにある障がい者の方たちが働いているレストラン「びすたーり」で昼食。昼食のあと、横浜グループの 9 名は福祉車両 2 台とレンタカーを運転して石巻へ出発しました。



\*

今回の福祉車両の寄贈は、災害直後、横浜移動サービス協議会・山野上啓子さんが横浜市社協に呼びかけた「市内 18 区社協で廃車車両があったら、被災地に贈りませんか？」という声に対して、青葉区社協がこたえてくださ

ったことから実現しました。また、現地の車両の受け皿を仙台 GIL たすけっとの菊池さんや、地域生活オウエン団せんだいの杉山さんにお骨折りをいただきました。

車両整備、看板、雪道対応のためのタイヤ交換、名義変更、初回自動車保険まで、横浜移動サービス協議会ほか多くの方々が支援。

（物質的な支援は社協が持ち、活動支援となる保険は全国移動ネットと横浜移動サービス協議会が負担）

車両の側面に記された「寄贈」の文字、「青葉区社協」、「横浜移動サービス協議会」、「全国移動ネット」の名前に、そのあたたかい連携があらわれていました。

また、横浜市社会福祉協議会は「こんなかたちの貢献ができた！」ということで、今回の贈呈について、同協議会発行の季刊誌『福祉よこはま』誌上で、取り上げてくださるそうです。次は南区社協の車両の贈呈先を検討中です。

このほか 12 月には岐阜市民協を通じての福祉車両の贈呈もあり、多くの方からの支援をいただいています。ご協力くださった皆さま、ありがとうございました。





